

リーお目の
キハ、うう分は
~~前~~回の残り分
なうい、筆を
おしのかつて
やわわいい

お
泊
る
塩
と
つ
く
る

一
 ち
 ず
 受
 え
 け
 九

子
母

天
寬

山西屋

次郎長

集つていゝ人達は大抵「山本さん」とか
まんでいゝ中には「親父さん」と呼ぶ
人がある。ところでも次郎君は「はい」と
答えた。それから如何にも顔すまう
で、頭がふくふくししやがれ出でゐる。

國神をして、たうなもを
 みたが、相模が薩土州の土主なり
 と説をしたのでやうと明してやつたな
 どという節い混分とはな言かつた。加

「子供にも目についたのは腕が太くてもな
かった事で、未だにはつきり覚えて居り
ますよ」

ところで、次郎は本國に郎に引合せた松岡萬の語である人名辭典を見ると「つもろ」とよまれているが、萬の關係に當る松岡敬夫さんに「何うと「よもろ」といふことがいかにも知れた

山陽談舟など、**一**度でわねえ知つての
た頃**頃**は、**一**回、**一**かたに内證で辻此
などもやつたようだ。日頃の習慣
一**一**後年大酒をする時、これを見出しして
ひどく苦悶し、あらぬ口走つたりし
た。**一****一**とらう。
しかし本来が心の如水のように清麗で

ある日、山岡と立寄つて笹ヶ谷の裾端
歩いてゐた。もう暮れかけていたが山岡
が小便をしていると、松岡はどんなん
さに行くとどうも只求でないものを感
られるから山岡が、はつとしてふり返
ると、一向ばかり先きで松岡がどう
も人を斬る操持だ
「また助めやがった。困つた野郎」

五止

江虎

その時
今頃
う見え
も

大

林田工
山子
寶瑞堂

まろむ
金達
い沙に
に

（月刊）

1-2